

---

# 北天女神譚異聞 ~ It's A Bath Time! ~

羽衣石

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

北天女神譚異聞〜It's A Bath Time!〜

### 【Nコード】

N4157I

### 【作者名】

羽 衣石

### 【あらすじ】

原作第一話より少し前、一級神二種限定解除となる前のベルダンデーの日常を描いてみようかと試みております「北天女神譚異聞」。今回はショートショート風な作品を目指して書いてみました。オリジナルキャラのイドウンにつきましては前作「北天女神譚異聞〜On Green Apples Street〜」をご参照いただければ幸いです。

アスガルド。天上界と呼ぶ者もいる、神々の住まう所である。三層九界に分かれる宇宙の上層に位置し、最も強い光りに溢れる世界である。中央に最も巨大な世界樹であるユグドラシルがそびえ立ち、大地から吸い上げ葉に集めた力を、世界に住む者たちに余すところ無く注いでいた。

ある日、アスガルドの美しい女神の一人が人間の世界へ降臨する。そしてある男と恋をして幸せに暮らすようになるのだが・・・この物語はそれよりも少し前の出来事である。

絹を引き裂くような、とは天上界でもよく使われる言い回しである。人間界と異なるのは形容されるのが女の声ではなく女神の声と言うことであろう。

終業時間が近づいたお助け女神事務所で突如上がった絶叫を聞きつけ、事務次長イドゥンは専用のオフィスを飛び出した。運営責任者として部下の女神たちの安全管理義務と言うものが彼女にはある。何事が起こったのか一刻も早く確認を取るべく彼女は廊下を駆け、階段を飛び降り声のしたフロアを目指した。この迅速な行動は彼女が本質的に、「嵐が来るとわくわくする」性格であることにも由来するのかもしれない。

現場は浴室であった。女神たちは単に「お風呂」と呼び習わしているが、そこは階層を丸ごと使った大浴場である。お助け女神事務所の創設者である女神総長は、数多の神々の中にあつて無類の風呂好きで知られている。事務所建設にあたって何より重要視したのがこの大浴場である。ちなみに彼女の邸宅には琵琶湖に匹敵する広さの浴槽があり、無論彼女以外の何者もその湯に浴することは許されていない。

生命体としては決して脆弱なものではないのだが、女神の肉体は

男性の神や天兵たちに比べ非常に繊細にできている。健康維持のため定期的な衛生管理と循環器機能の向上が必須であり、沐浴は女神にとつて義務でもある。だからと言つてなぜ沐浴するかと女神に問えば、単に「好きだから」と答えることであろう。

イドウンが浴室前に到着すると同時に、浴室の入り口から五人の女神が飛び出してきた。

「次長、お湯が・・・お風呂のお湯が・・・全然沸いてないです！」  
「服着てきなさい！」

お助け女神事務所の裏から階段を下りると半地下のボイラー室がある。水素燃料を使用する貫流式のボイラーと上層の浴室へ熱湯を循環させる燃料電池により稼動するポンプが収められている。イドウンとベルダンディーの二人がピンク色の作業服つなぎに着替え点検を行っていた。ベルダンディーが端末を接続して制御装置のプログラムを確認し、イドウンは配管を伝つて機械の異常個所を探している。仮にも事務次長とサービス課のリーダーである二人がなにゆえこのような作業を行っているかといえば、ひとつには本来こういった業務を行うべき庶務課の天女たちが先だつて休日返上で棟屋の一斉清掃を行いその代休を取つていたためだ。そしてもうひとつには、お助け女神事務所の運営規定第三五―七九条に「業務によつて沐浴する必要が生じた女神にはいかなる弊害があつてもこれを実行させしむべし」との記載があるためである。もちろん女神総長が直々に定めたものだ。

端末の三次元水晶ディスプレイが高速でスクロールし、眼鏡越しにベルダンディーは分析プログラムの進行を確認していた。その後では時折爆発が起こり黒煙が噴き出すのだが、ベルダンディーに動じた様子は全く見られなかった。

「次長、ソフトの方は全く異常ありません。」

振り返つて語りかけるベルダンディーの視線の先で、顔を煤だらけにしたイドウンが煙にむせながら配管のすき間から這い出してき

た。幾つかの事業所に勤務したところのあるイドゥンには、普通女神の苦手とするところの機械の整備にも経験があり日常点検程度であれば自分で行うことが出来る。しかし今回はお手上げのようだった。「燃焼系の異常だけど、原因がぜんっぜんわかんない。これ、技師さんに来てもらわないとだめだよ。」

「でもここの機械はかなり複雑だし、これからすぐについてわけにはいきませんよね。」

「とりあえず上と回線つなげて。」

ベルダンデーは端末の接続を屋内通信回線に切り替えた。ディスプレイに浴室の脱衣場で待つ女神たちの姿が映された。

「だから服くらい着なさいよ。」

端末の内臓マイクに向かってイドゥンがあきれたように語りかける。彼女たちはバスタオルを美しい肢体に巻きつけたままボイラーの修理を待っていたのだった。

「だって、わたし今日人間界の砂漠に降臨して来たんですよ。汗流すまで着替えたくありません。」

「あたしは赤道直下の孤島に行ってきました。」

「夏コミ、すごく熱かったです！」

口々に言い放つ女神たちにイドゥンは憮然とした。何でまたこんな日に限ってみんな汗をかくような場所から救済を依頼されるのか。「それがね、今すぐ修理してわけにはいきそうにないのよ。みんな、今日は早退させてあげるからうちに帰っていいわよ。」

ところがイドゥンの提案に女神たちは一斉に反発する。

「ダメですよ、わたし仕事ひけたらすぐ彼氏の所に行く約束してるんです。」

「あたしたち合コン会場に直行するんですから。」

「新作ソフトの発売日なんです、すぐ行って並ぶんです！」

どうもこの辺りの訴えは苦勞神くろうじんで既婚者のイドゥンには納得のいかない主張である。しなやかな右手の神差指かみさしゆびで眉間を押さえながら怒りを抑えていた。

「ベルダンデー、わたしなんだかすぐく腹立ってきたんだけど。」  
マイクが拾わない程度の小声でイドウンがつぶやいた。

「わたしが法術試してみましようか。」

ベルダンデーの控えめな申し出にイドウンは首を横に振った。

「だめだめ、故障してる機械を法術で強制的に動かしたらそれこそ修理不能になっちゃう。」

法術を使えば結果的にお湯が出る状態を実現するために、燃焼筒内部での過剰な温度上昇や燃料の成分変質、あるいは配管内での沸騰や加圧を引き起こす。それらは機械に設計上想定し得ない負担をかけることになり、決定的な打撃を与えかねない。人間界の航空機エンジンや核融合炉ならともかく、天上界の大型湯沸し機のような複雑な機械に下手な法術をかけることはできない。そこまで説明してイドウンはあることに気がつき、ディスプレイに映る女神たちに問い質した。

「昨日誰かお風呂で法術使わなかったでしょうね？」

全員が一斉にイドウンから視線を逸らした。かつとなりイドウンが端末に向かつてお説教を始める。大掛かりな修理が必要になれば事務所の予備費でも補填できない可能性があるし、何より大浴場の建造に並々ならぬ情熱を注いだ女神総長にボイラー損壊を知られればどんなお叱りを受けることが。

「女神総長さまに怒られるの、わたしなんですからね！」

ベルダンデーがなだめにかかり、ようやくイドウンは興奮を鎮め対策を考える。兎にも角にも事務次長として彼女らに沐浴をさせる義務を果たさなければならぬ。

「次長、今思い出したんですけど、事務所が開設されたころって庶務課は今より規模が大きかったんですね。」

ベルダンデーにそう言われてイドウンは所史の記録を思い出した。当時は女神総長が事務所長として常勤していたため、毎日のように浴室を使用していた。施設管理を担当していた庶務課の中でも浴室専任のスタッフは女神総長直属組と呼ばれ、専用オフィスは最

上階にある所長室の直下に置かれていた。業務に当たっては他の部署より優遇されていて、建物中層階の浴室と最下層のボイラー室へは扉一枚で移動<sup>ワープ</sup>できるように空間跳躍魔法陣が常設されていたほどである。

「大きな声じゃ言えないけど、総長さまの公私混同がまかり通りまくりだったわけよね。」

「その専任チームが解散になったのって、このボイラーが設置されたからじゃなかったですか。」

「新し物好きの総長さまが新開発された全自動完全管理型給湯システムが欲しくなっちゃって、導入したら今度は人手がいらなくなつたって……。」

途中まで言いかけてイドゥンは気がついた。

「ベルダンデー、外。」

「はい。」

ボイラー導入前の給湯方法を思い出すと同時にイドゥンは駆け出し、ベルダンデーも後へ続いた。端末のディスプレイの中でバスタオルのみ巻いた五人の女神たちがその後姿を見送っていた。

鋼鉄製の重い扉が静かに開かれた。ベルダンデーの法術によってである。

「すごい……。」

勤務期間の決して浅くないベルダンデーであるが、初めて入った倉庫の様子に嘆息した。図面上は十坪ほどの面積のはずが時空間の重複<sup>ダブル</sup>効果で壁が遠く見えなくらいに広げられている。その空間にびっしりと薪が積み上げられていた。ボイラー導入後使用されることが無くなってしまったのだが、周辺地区を含めて非常時の緊急用燃料としてそのまま備蓄されていたのだった。

ベルダンデーはすぐに気を取り直して、法術言語を詠唱した。

目の前の山の一番上に積まれた薪が一本ずつ浮き上がり、順序良く宙を飛んで移動していった。その薪の飛んで行く先にはイドゥンが

いた。大きなかまどのふたを開き火かき棒を差し込む。三匹の猫が飛び出してきたのはびっくりしたが、後は続かぬようなので肘まで手を入れ火かき棒で灰をかき出した。さらに法術で乾燥した熱風を送り込み焚き口から煙突まで強制的に掃除をする。管理課のデータベースから意識内部に取り込みした配管図面を確認し、送水弁を切り替えるとボイラーへ循環する水がかまどの方へと回っていく。焚き口の前にはベルダンディーが送ってきた薪が次々と積み上げられていた。

毎朝の要領でイドゥンは火を熾した。完全密封の容器に収められていた固形燃料も湿気ることなく保存されていたので順調に燃えていった。そして薪を入れ始めたころにベルダンディーが貯蔵庫からやってきた。

「言われた通り薪を移動させましたよ。」

「こつちもオツケー、ポンプが無事でよかつたわ。」

炎の強い灯りがイドゥンの顔を照らし、熱で流れる汗があごからしたたり落ちていった。顔の火照りを気にする事無く薪の燃焼させ続けるイドゥンを、ベルダンディーは頼もしげに見守っていた。

「え、なに？」

額の汗をぬぐいながらイドゥンはベルダンディーの視線に気づいた。

「イドゥンってがんばるね。」

「まあ、女神ってひとのために働いてなんぼじゃないかな。」

彼女は幹部神の妻になっても、やっぱり自分で体を動かしていた性分なのである。

「誰かのために何かするって言うても、結局は自分の手の届くことしかできないじゃない。神格を高めて、法術使えるようになって、それって手をちよつと伸ばせるようになるってこと。座ったまま遠くに手を伸ばさなくても、立ち上がって前に出ればそれでいいですよ。」

薪をもう一つかまどに放り込んでから、イドゥンは思い当たって

ベルダンディーの方を見た。

「ごめん、ベルダンディーが限定解除のために一生懸命勉強してるのを否定するつもりじゃないよ。」

ベルダンディーは気を悪くした様子など見せず、かつての級友でもある上司に笑顔をむけた。一級神二種限定解除、または一級非限定神。その称号は神属としてありとあらゆる力、自由、権威、そして栄誉を象徴する。だがそこに至る道は遠く険しい。教育機関を修了しさらに多くの実務経験を必要とする。マークシートによる一斉<sup>クエ</sup>検査をくぐり抜け、個別の筆記試験や口述試験、論文や指定任務<sup>タスク</sup>遂行実績の審査など達成しなければならぬ課題が星の数ほどもある。科目が膨大で達成までに悠久の時間を必要とするため途中で挫折する者の方が多いくらいである。まして受験者の大半が学院や研究院に在籍して試験勉強を優先させているのに対し、ベルダンディーはお助け女神事務所という機関に勤めながら勉強を続けていた。彼女が労苦の多い道をあえて選んだのは何故か、その理由を他者に語ったことはほとんど無かった。

「さてと。」

イドウンが焚き口の前から立ち上がった。炎にあぶられた頬が、それこそりんごのように赤くなっている。

「わたし上の様子見てくるから、ベルダンディー、ここ頼める？」

「え、やったこと無いんですけど。」

「わたしだって初めてよ。まあ、後は火が小さくならないように薪を足していけばそれで大丈夫よ。」

歩きながらイドウンはベルダンディーに耳打ちした。

「参考書読みながらでいいんだから、適当にやっついて。」

非限定神が在籍することは機関や事業所にとっても名誉なことであるが受験はあくまで個神<sup>じん</sup>の意志であり、勤務中に業務を差し置いて勉強をさせるわけにはいかない。だが事務次長として、この程度の配慮は旧友にしてあげたかった。

「ありがとう。」

ベルダンディーの謝辞を背中に受け、右手を軽く上げながらイドゥンはボイラー室を後にした。

経理課のオフィスでスタッフから報告を受けていたイドゥンは、絹を引き裂くような女神の絶叫を耳にして飛び出した。廊下を駆け、階段を飛び降り声のしたフロアを目指してみれば、そこはやはり浴室であった。

「次長、お湯が・・・お風呂のお湯が・・・めちゃくちゃ熱いです！」

「服着てきなさい！」

はっと思いいドゥンはそばの窓から身を踊り出した。爆発、延焼、ボイラーの突然の再起動・・・壁面を垂直に駆け下りながら、イドゥンの脳裏に様々な想像が巡った。地上三階まで来た所で跳躍し、空中で一回転して着地する。再び駆け出すとそのままボイラー室へと飛び込んだ。

「ベルダンディー、無事？」

そこでイドゥンが目にしたのは、参考書を読み耽り火加減を見ぬまま次々と薪を放り込んでいるベルダンディーの姿だった。

「野口英世ですかー！」

二兎追う者はなんとやら、との言い回しも天上界には確かに存在するのである。

おしまい。

(後書き)

あ、ベルダンディーの入浴シーンが無かった・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4157i/>

---

北天女神譚異聞 ~ It's A Bath Time! ~

2010年10月8日12時01分発行